



Title	国民社会の研究各論 第四章 通巻第十八巻: 国民社会の社会構造 27
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1963-08-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77518
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集7(国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である(同書内での言及による)。
File Information	1035_013761627.pdf



[Instructions for use](#)

27

各論(15)

K-5

23

NOTE BOOK

國民社会の社会構造

國民社会の研究

各論
十四章

通卷才十八卷

昭和二十七年六月十六日

MA3



HANKYU

KYOYEI

27

地味と稼割りにお金を前受するのて道なり。

食ふものがあるから人は生きたまう。近頃の食むものがあるも三斗の生かばい、食むものあるか、生きたまうからいれた。

十中學校は東京に高宮空校に中々都市に大宮は大都市にあつた大宮といふ。總て口をみる。

子共は今は令に書するも共に口を管理にあり

農地地方にも学校で教育され。原則として夫婦は後制に教もするを認めは同居してよ。

最低賃金制度の確立

最高所得制限の確立

最高は精に最低の三倍止り

※生活環境の改善

宗教的・道徳的な厚地の物から解放され人は皆大半をおもひ合致せしめ及し有り余る生活環境の中に生活を果しめばよい。是に近づくと道として右の次第を

五九〇

口良社会の社会構造目次

第一節 地区組織と生業組織

第二節 上下組織

第三節 社会的交流現象

第四節 協力関係の各種と秩序

第五節 協力の時の空間的秩序

と制限の限界

第六節 革命と目標理想

※左の全理想を敢てし

人々のための方法

第一回 出生と同時に(出生と共に)

第二回 学舎の時

第三回 十五才の時

(必要に応じて)

村落では共同体を積体として

都市では世界と職場（宗教）を

同一の二元の構造として（二元の精

造として）理解される社会構造。

二、この二元構造は明白に確知し得

る。共同体は何か、何かがそれと、どんなに

既知であるのか、どの共同体か。

最も強固であるか、それによる

その二元の構造を決定して、い

のほとの共同体の活動（基礎的）か

知るとするものである。この場合、村

落では集落組織、都市では産業

二種の集落が基礎的である。これを

第一、地色組織と生業組織
（生活の本質を長期に亘って固定して
いる。人口の同い、生活協力の組
織が地理的でない。何程かの
善悪を任頼に相対するは善知
である。近隣、排他を基礎
とする。村落と都市、は何れも地色
である。天賦人間に對する共
同防衛と生活協力はその基本的
な機能である。聚落二元と云ふ
が要する。

生業組織、人がその生業におい
て協力する、その組織としての組織

村落と都市、何れも地色

天賦人間に對する共

同防衛と生活協力はその基本的

な機能である。聚落二元と云ふ
が要する。

生業

※交易性の高い機園程その生業

活動の本據は生活の本據即ち住

居より分断す^し事^を必要とす

と思はれよ。生業活動の本據

は住居の外に生業産物を必要

と^し可^しる^に至^る。都市に於ては生業

は^一般^にの^高い^の所^にあり^てある^のが^し住

居の外に^生業^活動の本據が都市

に^は必^ず理^する^に至^ると思はれよ。

又規模の大きい生業活動程住

居より分断す^る事^が必要と^する。而

者即ち生業と生活はその性格が各

目的の

まよか、完全に自給自足の生活は不

可能とす^るに至^る。大^々小^々の民は何等^か

形での交易の過剰を^通して生業と

学ん^てい^る。交易の過剰の多い生業は

お水は少ない生業もある。多^くの^は知

市に^は少^いのは^必ず^なる^に思^はれ^る。#

生業活動に^おけ^る生業の^累位^を

機園と^いふ。都市に^は生業^活動の

高い大規模の機園が^集ま^るて^いる。

機園は一般に大規模^な。所有

制^を受^ける。都市に^は機園は

競^つて大規模となり^て益^を独占^する^の傾

支府である。

向を示している。かくて大都市に存在

する大規模の機関は互の支那機関

互に甲部等に孫機関をわねるもの

であつて、自民社等の中心都市

にある機関及び法曹の大機関は

甲や都市に存在支部機関

して、

機関

右の如く生活する各々の生活主体として

協力をその組織から生み出すと共に

互作がその生活知の力の生産過程

や用果に同じ他の生活と交り

同好互の生活知の生産量

始まる。消費又はは他種の家業を
と交易する。同好のついでにその組織
を考へる必要がある。

例へば商店のついでにその業を
店同好、その商店の他大なる商店
強学用器購入先との同好、高品
販賣先との同好、店名業との
同好等、様々の同好が存してい
る。同業とのテリトリーの同好
も亦見出し得る。

生活活動が板について運ぶさへ
おればその活動の本據を中へて

生業の共同体の規模

一人生業又は宗族共同

五人以上の共同生業

五十人共同生業

百人以上

五千人

五万人

商店街組合、同業組合、労働組合

第一次産業

第二次産業

第三次産業

の標準的系列

これらの人同団体の網の目を構成している。

商世活動の未來圖

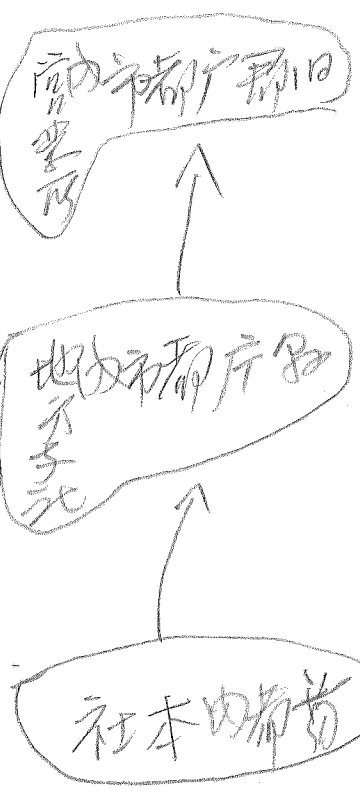
曲成

ハ又自轉

口臣

國民

サ一ヒ久業活動未來圖



商世活動未來圖

商世活動未來圖

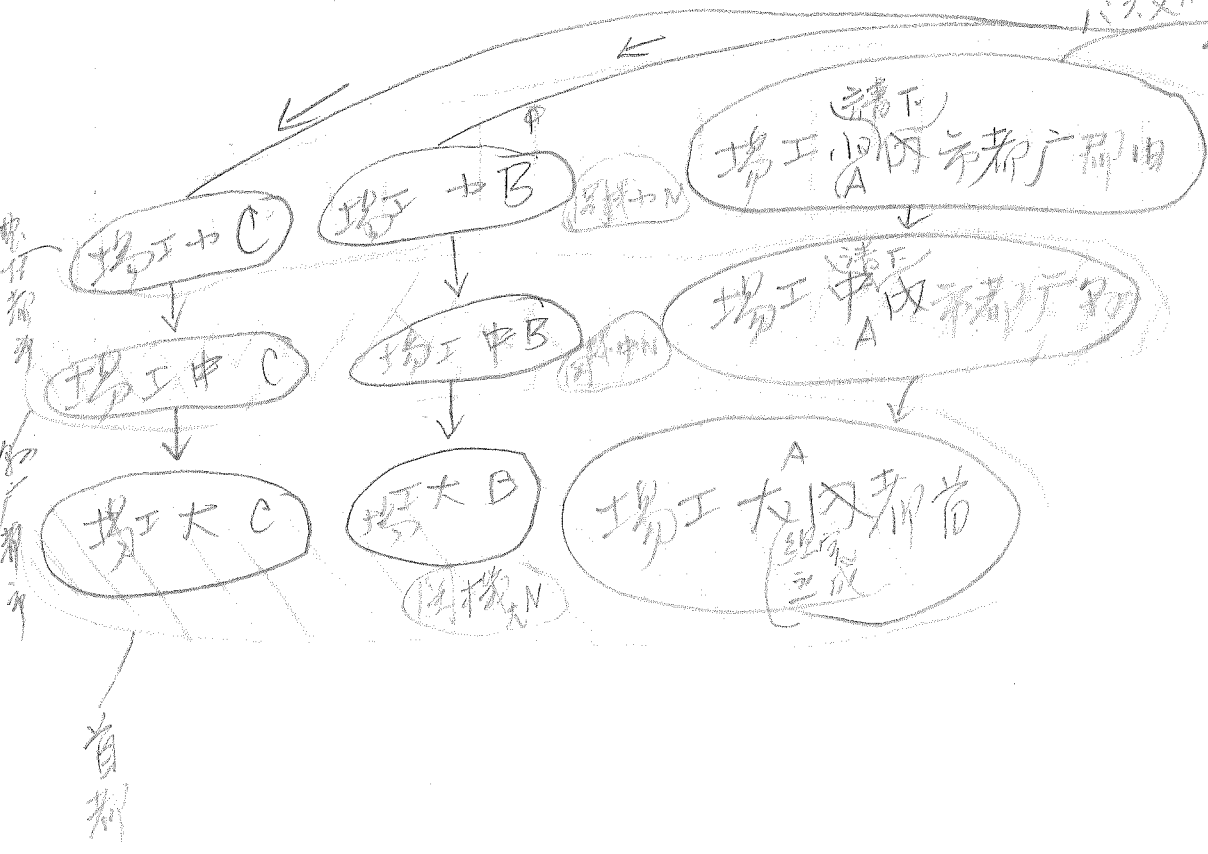
商世活動未來圖

日本の
未來工業口圖式

曲成

ハ又自轉

業權利に別工場運動、工場別に別工場



首都

第一項 三項 五項 七項 九項 十一項 十三項 十五項 十七項 十九項 二十一項 二十三項 二十五項 二十七項 二十九項 三十一項 三十三項 三十五項 三十七項 三十九項 四十一項 四十三項 四十五項 四十七項 四十九項 五十一項 五十三項 五十五項 五十七項 五十九項 六十一項 六十三項 六十五項 六十七項 六十九項 七十一項 七十三項 七十五項 七十七項 七十九項 八十一項 八十三項 八十五項 八十七項 八十九項 九十一項 九十三項 九十五項 九十七項 九十九項 一百項

① 市民社会の社会構造
結論として都市に集まるものは大規模
の地域外配置に市民社会の社会
構造の骨格を認めようかおれよう
都市が大オキ川は大オキ川機関が
大きく多く集まることよめが一般下
。大規模都市の附近の市民を主
視する大である。都市の中心の附近
の市民は多額の利益を享受する
す明らかなる。大都市の中心の
中心が大オキ川は金口を
同小規模といふ。市民社会の
都市生活を支えるものはその最

寄りの都方であり、その上は都平、
最良の首都である。この国は若
弟、阿蘇、桃園と通じて、終極の
故の国民を存を初めして、力は
都平と左の二は、果てしなく、桃園
の配置に新得の足立を、すか外
来る。この際、生活の本據を、この位
居は、大社と水と心と、故ル又豊村
は、冬と水と心と。左の二、よつ、下、
。

(九月二十三日)

快西 鐵道 及び 新 用 人 員 數 一 定 以 上

勞 働 基 礎 等 既 習 為 一 年 以 上 者 以 上
以 上 者 係 從 業 員 百 人 以 上 者 各 等 業 者
以 上 者 係 從 業 員 百 人 以 上 者 各 等 業 者

都 市 の 機 關 調 査

機 關 調 査 の 具 體 的 手 法 と 是 等

官 新 報 機 關 以 上 者 係 從 業 員 百 人 以 上 者

官 新 報 機 關 以 上 者 係 從 業 員 百 人 以 上 者

官 新 報 機 關 以 上 者 係 從 業 員 百 人 以 上 者

官 新 報 機 關 以 上 者 係 從 業 員 百 人 以 上 者

官 新 報 機 關 以 上 者 係 從 業 員 百 人 以 上 者

放射状配線形式
り環状配線形式

放射状配線形式の中心に集まる方式の場合

線路の長さによる電圧降下の交流路

線路は中央の電圧支那を強化して行

く形式であるが環状配線の交流によ

る同一層の力を縮成し統一して上層

層との対応に互に支け下層層の端

化に似たり線路を考慮される。

配線は上層いつたかよるかに同様に

たかよる放射環状配線形式とする

か使われて同一層の電力を紡集

して上層に向わすか使われてある

一人の労働者は無力であり、組合の總力を
を結集すれば有力となる。總力
を結集した労働者の力と資本家の
力
は互いにあるべきで、決して互いあつ
て互いに相接觸するよりなる。一人の
資本と一人の労働者との對等とは復
たの力と労働力の對等とはなく、
一と一の對等ではなく、一牙は一と一
とか他方は何分の一何百分の一何
千分の一の力である。

國民は生業の面では同一序列
の者か、同一列となつた上の序列に對等

そのうち出ると、橋に交流路線の
設置が工費それ一方は、
それには現状の交流の
上知と、橋の存在、
の設置が、

のビニール

アッソシエーションである。

しかし口芪を包んでいゝようなビニール

の内一番が厚いビニールは口芪である。

口芪のビニールなるは今では一冊も

和に思ふ被^レ裁。口芪の庇障に於

てある^レは^レ金^レ口芪の代^レの

今では考へ^レます。水^レだ。

今では^レ口芪の^レ包^レの^レぬ^レ

口芪は^レ成^レ告^レ入^レた^レと^レ。

今では口芪は^レ口芪は^レ人^レ体^レの^レ

す^レと^レ口芪の^レ格^レ不^レ可^レ欠^レの^レ中^レに^レあ^レるか

知^レて^レ人^レ体^レと^レ口芪^レが^レ別^レで^レあ^レる^レに

口良記介と兼哉は別である。